☆年間第29主日（10月16日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（出エジプト記 17 章 8-13 節）

　アマレクがレフィディムに来てイスラエルと戦ったとき、 モーセはヨシュアに言った。「男子を選び出し、アマレクとの戦いに出陣させるがよい。 明日、わたしは神の杖を手に持って、丘の頂に立つ。」 ヨシュアは、モーセの命じたとおりに実行し、アマレクと戦った。 モーセとアロン、そしてフルは丘の頂に登った。 モーセが手を上げている間、イスラエルは優勢になり、 手を下ろすと、アマレクが優勢になった。 モーセの手が重くなったので、 アロンとフルは石を持って来てモーセの下に置いた。 モーセはその上に座り、 アロンとフルはモーセの両側に立って、彼の手を支えた。 その手は、日の沈むまで、しっかりと上げられていた。 ヨシュアは、アマレクとその民を剣にかけて打ち破った。

第二朗読（使徒パウロのテモテへの手紙Ⅱ3 章 14 節-4 章 2 節）

　愛する者よ、あなたは、自分が学んで確信したことから離れてはなりません。 あなたは、それをだれから学んだかを知っており、 また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。 この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、 あなたに与えることができます。聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、 人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。 こうして、神に仕える人は、どのような善い業をも行うことができるように、 十分に整えられるのです。神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られる キリスト・イエスの御前で、 その出現とその御国とを思いつつ、厳かに命じます。 御言葉を宣べ伝えなさい。 折が良くても悪くても励みなさい。 とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです

福音朗読（ルカ 18 章 1-8 節）

　そのとき、イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、 弟子たちにたとえを話された。「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。 ところが、その町に一人のやもめがいて、 裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。 裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。 しかし、その後に考えた。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。 しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから 、彼女のために裁判をしてやろう。 さもないと、ひっきりなしにやって来て、 わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。』」それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。 まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、 彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。 言っておくが、神は速やかに裁いてくださる。 しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

　少しぐずついた天気が続いています。今日も曇りの日です。少しずつですが、秋の訪れを感じますね。新型コロナの感染状況も一進一退。ただひところに比べて社会も落ち着いてきたように思いますがどうでしょうか。しかし多くのものが値上がりし、生活は大変ですね。さて、今日のミサでは何が語られているのでしょうか。一言で言えば「祈りの必要性」でしょう。

第一朗読　（出エジプト記 17 章 8-13 節）

　モーセはアマレクと戦う時に、神の杖を手にもって丘の上に立ちイスラエルの戦いを見守った様子が語られています。モーセの見守りの様子はまさに祈りの様子を私たちに教えてくれています。モーセは両手を上げて祈っていたのです。疲れてきて手を下すとイスラエルが不利になり、手が上がるとイスラエルは優勢になったのです。モーセも人間ですから疲れも出るでしょう。そのため、

従者のヨシュアはモーセを座らせ，モーセの両手を支えて下がらないようにし、イスラエルの勝利を導いたと記されています。このことは疲れを知らない祈りの必要性を教えてくれています。教会には祈りに専念する人たちがいます。主に観想修道会の人々です。例えば調布市にある洗足女子カルメル会です。彼女たちの祈りによって教会は支えられていると言っても過言ではないでしょう。私たちは彼女たちの生活を支えることも祈りの一つなのだと考える必要があります。

第二朗読（使徒パウロのテモテへの手紙Ⅱ3 章 14 節-4 章 2 節）

パウロは愛する弟子のテモテに受け継いだ信仰を強く保つように語り掛けています。その中で、聖書について語っています。もちろんここでいう聖書は旧約聖書のことですが、この旧約聖書はイエスへの信仰をより深く理解することに役立つと言っています。それは救い主イエス・キリストを指し示す書物だからです。パウロは聖書について「聖書はすべて神の霊の導きのもとに書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえで有益です」と述べています。パウロは聖書が神の導きのもとに書かれた書物だと理解していたのです。そして有名な言葉を残しています。「折が良くても悪くても励みなさい」と。今の時代は良いのか悪いのか議論するよりも、祈り、行動する信仰が大切なのです。

福音朗読（ルカ 18 章 1-8 節）

ルカはイエスの祈る姿や祈りについての話を伝えてくれています。ルカはイエスの様々な行動や話の中から祈りの大切さを学び、私たちに伝えてくれているのです。「絶えず祈らなければならない」とイエスは言われます。ちょうどアマレクとイスラエルが戦った時にモーセが手を上げ続けて祈った時のようにです。またイエスは他のたとえを話しています。質の悪い裁判官の話です。しかしこの裁判官にしつこく迫った寡婦は、意地悪い裁判官を動かすのです。イエスはこの寡婦のようにしつこく、ひっきりなしに祈れと教えてい

ます。なぜならイエスの神は父なる神であり、助けを求める人々を放っておかれないからです。私たちは祈るとき「天におられる私たちの父よ、・・」と呼び掛けます。それはイエスが教えてくださった神の本当の姿が「父なる神」だからです。

晩秋の穂高連邦　（2021 年 11 月）

P.S.

　来月の末には新しいミサの式次第に沿ってミサが行われます。初めから１００点でなくても、恐れずに進みましょう。パンフレットがありますので目を通しておきましょう。

カトリック足立教会

主任司祭　野口重光